

## 競

走馬が活躍後、どうなるかご存じだろうか。競走馬には二〇年から三〇年ぐらい生きる馬もいる。日本では一回も勝つ事が出来なかった三歳馬がその後も生き続けられる事はない。競馬で優れた成績を残したオスは種牡馬、メスは繁殖牝馬、まだ力のある馬は地方競馬場に行く。役割を果たしたら、本来の寿命を終えずにペットフード。世界的には引退競走馬へのアフターケアの動きが出てきた。

岩手県八幡平市にあるクラリー牧場では性格の良い元競走馬を引き取っている。現在三三頭が馬術競技用の馬として活躍するとともに余生を送る。オーストラリア生まれのクラリー・リドリーさんは、障害飛越競技選手としてワールドカップで優勝するなど活躍し、馬のトレーナーとして来日した。安比高原乗馬クラブで指導を始めたところ、競技馬の能力を備えた馬が日本では無償で手に入ることに大変驚いた。妻の陽子さんはこのクラブに勤務し、クラリーさんの通訳を務めたことがきっかけで結婚。平成十年、念願だった「クラリー牧場」を開設した。雄大な岩手山麓を背景に乗馬選手育成や乗馬教室も行っている。

人間と共に暮らし、人間のため働き続けた馬の面倒を最期までみたいと考え、牧場に全財産を出したクラリーさん夫妻は馬好きな純粋な人。未来のある馬が殺処分されないためには、乗馬人口を増やし多くの馬が必要とされる環境を作

## 各 人 各 説

# 東京オリンピックと馬糞力

江戸川大学社会学部現代社会学科 教授

## 鈴木輝隆

Terutaka Suzuki



る必要があるが、預託料が月十数万円のため敬遠されがち。リーマンショック以降は馬主も減少し経営は厳しい。クラリーさん夫婦には後継者がいないので、若い乗馬選手の船橋慶延さんに経営再建を託した。

経済性や合理性とは一線を画した理念をもつクラリー牧場では、不必要に抗生物質やワクチンの投与を行わないので、匂いがない良質の馬糞が特徴だった。そこに目をつけた船橋さんは、馬糞堆肥一〇〇%の無農薬・無化学肥料で野菜を栽培、生育が良く味も良好な野菜の収穫を実現した。馬糞堆肥の収入を馬のエサ代にし、耕作放棄地を草地化して馬数を増やし、オーガニックな農作物生産・販売を軌道に乗せ、地域活性化を行い、子供たちが馬と共存できる循環社会を夢見ている。

昨年十一月、東京銀座で養蜂に取り組むNPO法人銀座ミツバチプロジェクトが、この馬糞堆肥を使用した農園をビル屋上に完成させた。土を浅くしか使えない屋上でも、馬糞堆肥を使用すれば軽量で、気になる匂いもない上、有機栽培により緑化が加速できる。

船橋さんは気がついた。開催が決まった東京オリンピックに向け、馬糞力で都心ビル群の屋上緑化を進め、東京を緑あふれる街にしよう。馬糞力を信じて人間と馬の共存社会が実現できれば、都会と地方が「人馬一体」となり、白い日本が実現できる。